

西之表市史 目次

【上 卷】

本 扉 (揮毫 西之表市長 八板 俊輔)	
口 絵	
発刊のことば 西之表市長 八板 俊輔	
発刊にあたって 西之表市史編集委員長 徳永 和喜	
目次	
凡 例	
第一編 自然	
第一章 大地の成り立ち	3
第一節 西之表市の地形	3
一 琉球列島と琉球海溝・沖繩トラフ	3
二 種子島近海の海底地形	4
三 低島タイプの種子島	4
四 山地と河川	5
五 段丘地形	6
六 砂 丘	7
七 活断層	8
第二節 西之表市の地質	9
一 地質の概要	9
二 熊毛層群	10
熊毛層群の概要／各地の熊毛層群	
三 茎永層群	14

茎永層群の概要／西之表市内の茎永層群	
四 増田層形之山部層	16
増田層／形之山部層／長谷層・竹之川層	
五 海浜堆積物と漂着軽石	20
ビーチロック (海浜岩)／デューンロックと砂鉄／漂着軽石	
六 種子島の火成岩類	22
火成岩類の概要／カンプトナイト	
七 西之表市のテフラ	24
種子島に分布するテフラの概要／更新世中期から後期に噴出したテフラ／阿多テフラ／西之表テフラ (KITZ)／種I〜種IV テフラ／ATテフラ／湯向降下軽石／桜島薩摩テフラ／鬼界アカホヤテフラ	
八 その他の火山噴出物	30
第三節 地震と津波	30
一 種子島周辺の地震と津波	31
二 被害地震	31
三 地震による津波	32
第四節 馬毛島	33
一 馬毛島の地形	33
二 馬毛島の地質	34
三 鬼界アカホヤ噴火に伴う噴礫脈	36
四 津波 石	37
第二章 西之表市の気候	39
第一節 気候の概要	39
第二節 気温	39
第三節 降水量	41
第四節 風	42
第五節 その他の気象要素	43

第六節 気象災害 43

第三章 生きものの世界

第一節 種子島の植生

一 植生の概要 45

二 種子島の植生(植物群落) 47

森林/草原/その他改変地

三 種子島の植物群落の相互関係 63

四 馬毛島の海岸植物群落 63

五 種子島の植物相 65

種子島の気象と歴史/種子島の植物相/馬毛島の植物相・植生

●コラム ● 馬毛島のブナ科植物 74

第二節 菌類 75

第三節 脊椎動物 78

一 種子島の哺乳類 78

生物地理区概要・種子島の位置づけ/哺乳類相の概要/ニホン

ジカ ―生物学的特徴と人とのかわり―

二 種子島の鳥類 85

野鳥の種類/暮らしのなかの野鳥

三 西之表市の両生類・爬虫類 91

はじめに/種子島の両生類・爬虫類/馬毛島の両生類・爬虫類

四 種子島の魚類 97

はじめに/種子島西方に位置する生物地理境界線/黒潮による

種子島の魚類相の形成/種子島の特異的な魚類相/種子島の魚

類多様性/種子島から発見された珍しい魚類/馬毛島の魚類多

様性/種子島の魚類多様性の解明と保全にむけて

第四節 無脊椎動物 104

一 西之表市の昆虫類 104

自然の概要/昆虫相の成り立ち/昆虫相研究の歴史/注目すべ

き昆虫類/馬毛島の昆虫類/おわりに

二 西之表市の陸水産エビ・ヤドカリ・カニたち 118

はじめに/種子島の陸水産甲殻十脚類/馬毛島の陸水産甲殻十

脚類/西之表市の陸水産甲殻十脚類―湊川を例に

三 種子島の貝類 125

貝の種類/暮らしのなかの貝

第四章 人と自然 133

第一節 人と植物 133

一 祖先の知恵 団子を包む植物 133

二 歴史が伝える植物たち 134

からいもと安納芋/庭先の植物/生垣の樹木/家の繁栄・安全

を託する木/牧と植物

三 子どもたちを幸せにした植物 140

四 里山の植物 142

堆肥と緑肥/里山の有用植物

五 行事、祭礼に使う植物 147

六 生活を豊かにした植物 148

七 草花遊び 149

第二節 天然記念物 154

第三節 国指定天然記念物 156

一 種子島国上湊川・阿嶽川のマンングロープ林 156

第四節 鹿児島県指定天然記念物 157

一 種子島のハナサンゴモドキ 157

第五節 西之表市指定天然記念物 158

一 ガジュマル防潮林 158

二 ソテツ自生群落 158

三 ツキイゲ自生群落 159

四 ヤッコソウ 159

五 漣 痕	160
六 砂 火 山	160
七 ウシウマの骨格	161
八 ヘゴ自生群落	161
九 西之表象化石	162

第二編 先 史

第一章 総 論

第一節 取り扱う時期区分と年代	177
第二節 土器型式とは？ 考古学の年代のものさしとしての土器	181
第三節 残っていないモノを視る科学	183

第二章 旧石器時代

第一節 人類の誕生と拡散	184
第二節 旧石器時代の気候と環境	186
第三節 旧石器時代の南九州	188
一 時期区分	188
二 旧石器時代の種子島の主要遺跡	191

第四節 人々の暮らし

一 石器製作技術	199
二 石器の機能	201
三 狩猟採集民の活動痕跡	203

第三章 縄文時代

第一節 縄文時代草創期	205
一 土器作りの始まりと石器の変化	205
二 草創期のムラのように	208
種子島の遺跡／薩摩・大隅地域の草創期遺跡／東シナ海沿岸部の遺跡／大隅半島の遺跡／草創期の遺跡観	208

三 温暖化するなかでの種子島の暮らし	214
第二節 早 期	218
一 貝殻を使った土器	218
二 早期の人々の暮らし	223
三 火山活動と早期文化	229

第三節 縄文時代前期

一 鬼界アカホヤ噴火後の種子島	231
二 西九州の土器(曾畑式土器)と大隅諸島	232
三 前期の人々の暮らし	234
四 中期に向かつて	236

第四節 縄文時代中期

一 土器の様子と遺跡	238
二 交流のあり方	241
三 中期の人々の暮らし	242

第五節 縄文時代後期の文化

一 土器文化と種子島の遺跡	244
使われた土器型式と石器／大隅諸島の後期の遺跡	244
二 南西諸島と南九州の集落遺跡	248
南西諸島の集落／南九州の集落遺跡／貝塚の形成	248

三 縄文文化の南北交流

南北の土器の交流／石器文化の列島化	253
四 漁労・狩猟・採集・栽培民の生活	256
五 北と南の文化を繋ぐ種子島	259

第六節 縄文時代晩期

一 晩期の土器と種子島の遺跡	260
二 交 流	263
三 縄文時代栽培と朝鮮畑作文化	264

第四章 弥生時代・古墳時代相当期……………266

第一節 弥生文化との関わり……………266

第二節 弥生時代相当期の種子島の暮らし……………267

一 弥生時代相当期の遺跡……………267

二 土器から見た種子島の特質……………267

三 人々のくらし……………272

四 墓……………275

田之脇遺跡／上浅川遺跡／鳥ノ峯遺跡

第三節 古墳のつくられなかった種子島……………282

一 広田遺跡の人たち……………282

二 西之表市の古墳時代相当期の墓……………287

三 上能野貝塚の様相……………290

榎ノ木遺跡／横峯遺跡

第五章 特論……………294

第一節 日本列島の縄文文化の中の種子島……………294

一 はじめに……………294

二 日本列島の島と縄文文化……………294

いつから島に渡ったか／島に渡る理由／九州の島／そして種子島

三 玉（石製装身具）からみた種子島の縄文文化……………296

珠状耳飾／大珠／玉（石製装身具）から見た種子島の縄文文化

四 種子島からみた日本列島の縄文文化……………300

五 おわりに……………300

第二節 圧痕資料からみた人々の暮らし……………301

一 圧痕とは……………301

二 圧痕調査の方法……………302

三 圧痕調査の成果……………302

四 一万年前のコクゾウムシ圧痕の発見……………305

五 土器製作具復元への応用——土器作りの敷物の復元……………307

第三節 種子島と南島——先史時代の南北交流……………310

一 はじめに……………310

二 縄文時代の南北交流——土器の動きを中心に……………310

種子島と南島の土器文化の始まり——縄文草創期の交流——異なる地域の土器／火山活動と南島の独自性の萌芽——縄文早期の交流／奄美・沖縄文化圏の形成と曾畑式土器文化の南下——縄文前期の交流——南島の土器の北上と種子島——縄文中期の交流——種子・屋久人の主体性——縄文後期の交流——黒曜石の南島への流通——縄文後期から晩期の交流——南北交流の変化

三 弥生時代の南北交流——九州との貝交易……………315

貝交易の始まり／種子・屋久人と貝交易

四 古墳時代の南北交流——貝殻採取と鉄器の提供……………317

広田遺跡の貝文化／種子島人の南下と貝殻採取／貝殻と鉄器の交換——奄美大島の拠点／種子島人の南下の特徴

五 おわりに……………318

第四節 人骨からみた種子島の人の成り立ち……………319

一 人類誕生から日本列島への人類の進出……………319

二 種子島への人類の進出……………320

三 種子島から出土した人骨……………320

四 人骨形態の時代的変遷……………321

縄文時代人骨／弥生・古墳時代／中世人骨／近世人骨

五 おわりに……………327

●コラム● 「種子島出土の動物遺存体」……………328

第三編 古 代

第一章 古代の種子島…………… 349

第一節 『日本書紀』の掖玖と『隋書』の夷邪久国…………… 349

- 一 「東アジア世界」の中の日本…………… 349
- 二 隋の成立と「東アジア世界」…………… 349
- 三 唐の成立と「東アジア世界」…………… 350
- 四 七世紀前半の掖玖…………… 351
- 五 『隋書』の夷邪久国…………… 352

第二節 天武・持統期における南島・隼人政策…………… 355

- 一 天武・持統期という時代…………… 355
- 二 天武・持統期における多禰島人の朝貢…………… 355
- 三 飛鳥寺の西…………… 357
- 四 天武・持統期における隼人の朝貢…………… 359
- 五 天武・持統期における隼人の儀礼参加…………… 361
- 六 前隼人司の成立…………… 362
- 七 律令形成期の地方支配…………… 362

第三節 南島覓国使の派遣について…………… 364

- 一 律令国家の地方支配…………… 364
- 二 南嶋覓国使関係記事…………… 365
- 三 南嶋覓国使派遣の目的…………… 366
- 四 律令国家の隼人政策…………… 368
- 五 律令国家の南島政策と種子島…………… 370

第四節 多檜嶋の時代…………… 373

- 一 多檜嶋の成立…………… 373
 - 二 多檜嶋の嶋司と郡司…………… 374
- 国司とは／多檜嶋司の特徴／左遷されてきた多檜嶋司／郡司とは／多檜嶋の郡について／多檜嶋の郡司について……………

三 古代における地方と仏教…………… 382

多檜嶋と仏教

四 多檜嶋の国府と嶋分寺の所在地をめぐる…………… 383

多檜嶋の郡家をめぐって／多檜嶋の駅家をめぐって……………

第五節 多檜嶋にやって来た人々…………… 388

- 一 第九次遣唐使…………… 388
- 二 第一一次遣唐使…………… 389
- 三 律令制下の刑罰…………… 390
- 四 多檜嶋に配流された人々…………… 390

第六節 多檜嶋の廃止…………… 392

- 一 多檜嶋停廢格をめぐる…………… 392
- 二 多檜嶋廢止の理由…………… 393

第二章 多檜嶋停廢後…………… 395

第一節 九く十世紀の大隅国…………… 395

- 一 大宰府管内支配の変化…………… 395
 - 二 律令制の弛緩…………… 396
 - 三 国司から受領へ…………… 397
 - 四 大隅守弓削仲宣と里倉負名…………… 398
 - 五 大隅守桜島忠信と郡司…………… 399
 - 六 気色の杜遺跡出土和歌墨書土器…………… 401
- 第二節 九く十世紀の南島…………… 403
- 一 喜界島城久遺跡の登場…………… 403
 - 二 大隅守春日宅成をめぐる…………… 404
 - 三 益救神社…………… 405
 - 四 「本朝月令」と口嚼酒…………… 409
 - 五 「延喜式」に見える南島…………… 410
- 第三節 南蛮襲来事件をめぐる…………… 412
- 一 長徳三年の南蛮襲来事件…………… 412

第四編 中 世

- 二 南島との交易 414
- 三 寛仁四年と天喜二年の南蛮襲来事件 416

第一章 種子島氏の系譜

- 第四節 キカイガシマとイオウガシマの時代……………417
- 一 西の境界としてのキカイガシマ 417
- 二 イオウガシマの登場 419
- 三 交易の拡大 421
- 四 城久遺跡の最盛期 421

- 第一節 中世の種子島……………451
- 一 歴代当主の事績 451
- 初代信基／五代時基（真時の子）／六代時充（時基の子）／七代頼時（時充の子）／八代清時（頼時の子）／九代時長（清時の子）／一〇代幡時（清時の子）／一二代時氏（幡時の子）／二二代忠時（時氏の子）／二三代恵時（忠時の子）／一四代時堯（恵時の子）／二五代時次（時堯の子）

第五節 島津荘の拡大と島津一円荘種子島……………422

- 一 もう一つの長元の乱 422
- 二 薩摩・大隅両国からの進物 425
- 三 島津荘の成立 426
- 四 中世的郡郷制へ 427
- 五 島津荘の動向 428
- 六 大隅正八幡宮 428
- 七 島津一円荘の多禰島 431
- 八 種子島の古代遺跡 432

第二章 鎌倉・室町時代の種子島……………456

- 第一節 鎌倉幕府の南島支配……………435
- 一 キカイガシマの変容 435
- 二 流刑地としてのキカイガシマ・イオウガシマ 436
- 三 頼朝によるキカイガシマ征討 437
- 第二節 キカイガシマ・十二島と種子島……………440
- 一 キカイガシマと十二島地頭職 440
- 二 種子島の地頭 442
- 三 『漂到琉球国記』 442

- 第一節 種子島氏の出自と入島……………456
- 一 伝承と史実 456
- 二 島津庄大隅方多禰嶋 459
- 三 東の中心、現和村 460
- 四 大隅守護・島津庄大隅方地頭名越家と被官肥後一族 461
- 五 肥後一族と種子島氏 463

第三節 南北朝期の種子島……………464

- 第二節 南北朝期の種子島……………464
- 一 時充の密謀と松浦党一族遠藤頼堅 464
- 二 種子島氏、南朝方につく 466
- 三 観応擾乱と種子島氏の去就 467
- 四 島への定着と七代頼時の戦死 468
- 五 今川了俊・満範の南九州経略と種子島 469
- 六 永和三年南九州国人一揆とその後 470
- 七 種子島氏と野辺氏 471
- 八 清時の野辺盛純殺害と出奔、そして帰還 472

●コラム● 都城養原合戦は何年に起きたか 473

第三節 種子島氏と島津氏……………476

一 種子島頼時の討死 476

二 大隅国守護島津氏と国人との関係 476

三 岩河盛久と都城袁原合戦 478

四 島津元久と種子島清時の関係 479

五 島津元久の上洛と久豊の家督継承 480

六 島津久豊の山東進攻と種子島氏 481

七 「国一揆」の勃発と種子島氏 482

八 種子島時氏誕生の経緯 484

九 種子島時氏と禰寝氏の婚姻 486

一〇 島津氏分国の争乱と種子島氏 486

一一 種子島氏と蒲生氏 488

第三章 中世種子島の社会と文化……………489

第一節 種子島の宗教……………489

一 律 宗 489

西大寺流律宗／律宗寺院慈遠寺

二 種子島と法華宗 491

薩摩三島開山・日典／薩摩三島二代・日良／法華改宗／薩摩三

島三代・日増／本能寺と種子島

●コラム● 上妻夫妻の寿像 495

●コラム● 種子島の熊野信仰 496

第二節 種子島・屋久島の中世城郭……………498

一 中世城郭のはじまり 498

二 中世から近世における種子島氏の城郭変遷 498

三 種子島氏と禰寝氏の攻防 500

四 近世に描かれた中世城郭 500

第三節 種子島氏の家臣団……………503

一 中世種子島氏家臣団の概要 503

二 史料にみえる家臣団 505

種子島家の知行高と家臣団の知行高

『種子島家譜』(六四家)／『二十人家傳記』(二五家)／『御家記』(五八家)／『慶長十六年高帳表』(七九家)／家臣団の出自

三 種子島氏家臣団の活躍 508

上妻氏／遠藤氏／古市氏／八板氏／笹川氏／武田氏／徳永氏／羽生氏／西村氏／知覧氏

四 おわりに 513

●コラム● 種子島と京都 513

第四節 古地図の中の種子島……………515

一 はじめに 515

二 いわゆる行基図の中の種子島 516

三 種子島、朝鮮に行く 518

四 大琉球・小琉球のなかの種子島 520

五 おわりに 522

第四章 鉄砲伝来と種子島……………524

第一節 種子島と琉球、遣明船……………524

一 種子島と琉球 524

二 種子島と遣明船 528

三 十六世紀の種子島とアジア 530

第二節 鉄砲記からみた鉄砲伝来……………531

一 鉄砲伝来からみた鉄砲記 531

二 西之に一大船が来る 532

三 筆談による対話 534

四 鉄砲への関心 534

五 国産化と島外への広がり 535

六 尾栓技術の習得と若狭伝説 537

七 国産化の成功と堺・関東への普及 537
八 鉄砲伝来と種子島 539

●コラム ● 「鉄砲記」を文芸として読む 541

第三節 鉄砲伝来の原典史料…………… 546

一 鉄砲記以外に描かれた鉄砲伝来 546

二 種子島系史料 547

三 根来・堺系史料 550

四 国友系史料 554

五 ポルトガル系史料(一) デイオゴ・デ・フレイタス系統 557

六 ポルトガル系史料(二) フェルナン・メンデス・ピント系統 562

七 中国・朝鮮系史料 566

八 様々な鉄砲伝来像 567

第四節 鉄砲伝来の研究史…………… 568

一 鉄砲伝来研究の起源はいつか 568

二 西村天因と近代黎明期の鉄砲伝来研究 569

三 『南島偉功伝』まで 571

四 銃砲実物史研究の進展 572

五 海外の研究 575

六 対外関係史からの着目 577

七 「鉄砲記」への疑問 579

八 ポルトガル人日本初来と鉄砲伝来 580

九 九州、種子島地域史 582

一〇 鉄砲伝来研究のこれから 582

第五節 鉄砲の技術・流通・生産技術、原材料など…………… 583

一 鉄砲とは 583

二 『鉄砲記』にみる鉄砲生産技術の伝来 585

三 尾栓の製作技術 586

四 原材料の輸入 588

五 鉄砲生産技術の畿内への伝播 589

第六節 鉄砲が語る歴史…………… 591

一 種子島に残る二挺の古式火繩銃の真相 591

伝来銃と西村家伝世の火繩銃／国産第一号銃と羽生武兵衛献上

の火繩銃／金兵衛清定作火繩銃に「定堅」の銘を発見

二 「永祿七年甲子種子島住定堅作」火繩銃の新たな発見 592

発見の経緯／銃の特徴／考察

三 平瀬家系図より「永祿七年定堅」を探る 593

経緯／系図の説明／初代「国清」二代「清定」「定治」の記事

／「定堅」について／三十三燈籠の作者「平瀬新兵衛」／平瀬

国清(石見)及び石見嫡男「清定」「定治」について

四 『種子島家譜』にみる鉄砲伝来前後の種子島 596

主な出来事

第七節 種子島に伝わる鉄砲伝来…………… 598

一 はじめに 598

二 鉄砲伝来を記す鍛冶家系図 598

村松系図／村松文書／徳永系図

三 伝来した南蛮銃 599

「故郷」と「腰指」／現存する「伝来銃」の履歴／まとめ

四 刀 鍛 冶 600

禰寝戦争の頃、種子島の刀鍛冶／禰寝戦争で活躍した刀剣鍛冶

平瀬石見／禰寝軍が永良部を攻めたとき、何故、石見は口永良

部島にいたのか／石見は鉄砲鍛冶「初代定堅」／平瀬家(本家・

庶流家)系図の比較／まとめ

五 国産第一号銃の謎 602

六 享保十九年の鉄砲鍛冶文書 603

七 鉄砲 鍛 冶 604

八板家系図(抜粋)／牧瀬家(石原家)系図(抜粋)／平瀬家

系図（抜粋）／江戸時代後期の鍛冶／刀剣鍛冶氏名（種子島家譜第二巻）／八板家清一流（庶流）／中種子町野間の鍛冶の起り／砲兵工廠の囑託として上京した種子島鉄砲鍛冶

八 古老からの問書 607

野崎四郎助（小牧野）談／牧瀬義美（東町）談

第五章 戦国時代の種子島

第一節 島津氏の家督継承戦争……………609

一 「三州太守」をめぐる抗争 609

二 島津薩州家忠興の死と相州家忠良の台頭 609

三 島津相州家の家督奪取と薩州家実久の反撃 610

四 享祿の和平会議と薩州家実久の家督奪取 611

五 瀬戸内水軍今岡氏から種子島への要請 611

六 島津忠良・貴久父子の薩摩半島平定 612

七 島津貴久の三州太守就任とその承認 613

八 種子島氏と島津薩州家・禰寝氏 613

九 天文七年末の加世田攻防戦 614

一〇 天文の種子島氏内訌 615

一一 種子島時堯正室とその娘 616

一二 種子島氏と禰寝氏の関係 617

一三 島津貴久の官位獲得と種子島氏 617

第二節 島津氏の大隅進出……………618

一 島津氏の大隅国進出と種子島氏 618

二 平松・帖佐制庄、蒲生城攻防戦 619

三 反島津方大隅国衆と島津氏の抗争 621

第三節 種子島氏と大友氏……………622

一 時堯の母は島津か大友か 622

二 「豊後王」の遣明船と種子島 623

三 豊後、鉄砲の一大産地に 625

四 大友氏配下での軍事活動 626

五 大友から島津へ 627

第四節 種子島氏の島津氏への従属化……………628

一 島津義久後室・種子島時堯の娘 628

二 島津義久の家督継承と種子島氏の役割 628

三 高城・耳川合戦 629

四 種子島久時の家督継承と内紛 630

五 島津氏の九州北上と種子島氏 631

第五編 近世

第一章 種子島の政治……………641

第一節 近世種子島氏の形成と島津氏……………641

一 近世における大名家臣 641

二 種子島氏の由緒と領域形成 641

三 豊臣政権期の種子島氏 642

四 近世初期島津氏の権力編成と種子島氏 645

第二節 一所持と「私領」領主……………650

一 藩の家格 650

二 門家／一所持・二所持格／寄合・寄合並／小番／新番／大番・小姓与／郷土／与力／足輕

二 薩摩藩の「私領」 652

三 「私領」と「私領」領主 654

四 種子島家と薩摩藩 656

種子島忠時の鹿兒島移住／種子島久照の知行地初入部

第三節 種子島の行政組織……………662

一 薩摩藩の行政組織とその特質 662

薩摩藩の石高／薩摩藩の行政組織／薩摩藩行政制度の特質―外

城制度と郷土制度

二 種子島の行政組織と職制 665

種子島の行政組織／家老／物奉行／用人／組頭／高奉行／山奉行／船奉行／記録奉行

三 種子島家行政組織の特徴 678

近世の種子島の自然と生業／種子島行政組織の特徴

第四節 種子島の身分制度 681

一 近世の身分制度 681

二 薩摩藩の身分制度 681

武士身分／百姓身分／町人・野町人・浦人／被差別民衆

三 種子島の身分制度 684

種子島の身分別人口／種子島の身分制度

第五節 種子島家と藩法 687

一 当主の系譜 687

一六代久時(時堯の子)／一七代忠時／一八代久時／一九代久基／二〇代久達(久基の子)／二一代久芳(久達の子)／二二代久照(久芳の子)／二三代久道(久照の子)／二四代久珍(島津家より養子)／二五代久尚(久珍の子)／二六代時丸(久尚の子)／二七代守時(久尚の次男)／二八代時望(守時の長男)

二 近世の城郭変遷 719

三 赤尾木城麓集落の形成 721

中世山城から近世館への変遷

四 種子島家の統治機構 725

種子島の統治機構と職掌／藩庁通達関係

五 二十人家 732

六 藩法 735

藩法規／種子島商売船規定／鹿狩猟と銃規制／鉄砲献上／馬毛島(漂来船対策)／伊能忠敬の種子島測量／種子島測量の日

数／村境界と漁場境界

第二章 種子島の経済 772

第一節 種子島の農政 772

一 薩摩藩の農政 772

検地の目的と意義／薩摩藩農政機構の整備／薩摩藩の郷村と門割制度

二 種子島の農政 782

種子島家による検地／種子島の村と村高

第二節 種子島の地域行政 789

一 薩摩藩の地域支配 789

薩摩藩の土地制度／薩摩藩の地域支配制度／薩摩藩の在り地運営／農村支配と運営／町の支配と運営／浦浜支配と運営

二 種子島の地域行政 796

種子島の村と地域の枠組み／農村支配と運営／町の支配と運営／浦浜支配と運営

第三節 種子島の経済 805

一 種子島の石高 805

藩検地と種子島領石高／種子島家石高／寺社寄進石高

二 種子島の人口推移 810

宗門手札改検使報告による記録／宗門手札改検使来島、人口記録なし／痘瘡流行による人口減／人口増減要因の自然災害

三 牧の歴史と吉野馬追 818

牧の歴史／当主の牧観覧と牧場数報告／牧と馬追にみる褒賞と刑罰／馬追中止と牧関係職掌／藩の政策／雑記／藩の吉野馬追と種子島家

四 藩調査 826

牛馬政策と牛馬数／船数調査／五葉松調査／藩財政改革者調所広郷と種子島

第三章 種子島家の外交…………… 849

第一節 異国船種子島漂来…………… 849

- 一 異国船の漂来 849
- 二 幕府の漂着船の取り扱い規定と変遷 852
- 三 漂来船の実際 853
- 四 難波船の取り扱い規定と実際 860
- 五 朝鮮と種子島 861
 - 朝鮮船の種子島漂着と朝鮮への種子島船の漂着／オランダ船
- 六 国内漂着・漂来船 864

第二節 種子島家の唐通事…………… 867

- 一 藩唐通事関係の職階と役料について 868
 - 道之島の唐通事
- 二 種子島の唐通事 870
- 三 藩領海漂着船の長崎廻航手順 873

第三節 琉球と種子島…………… 874

- 一 近世の種子島と琉球 874
 - 種子島家当主と琉球／船頭の活動／漂着民の送還／文化交流／種子島と琉球
- 二 琉球と種子島の交易・交流 882
 - 中世の琉球と種子島の交流／近世の琉球と種子島の交流

第四章 種子島の宗教…………… 887

- 第一節 法華宗寺院の本山…………… 887
 - 一 法華宗本門流 887
 - 二 両本山 887
 - 本能寺／本興寺
 - 三 末寺分布 888
 - 四 本山と末寺との関係 888
 - 新年の佳札を送る／上人号の免許／金銭の負担

第二節 法華宗寺院の概観…………… 891

- 一 法華宗寺院の門首 891
- 二 寺院概観 891
 - 薩摩国／大隅国／屋久島
- 三 種子島の寺院の三類型 894
 - 赤尾木三箇寺／種子島廿七箇寺／村落小坊／その他の寺院

第三節 法華宗寺院の僧侶…………… 906

- 一 僧侶の数 906
- 二 僧侶の生涯 907
 - 種子島出身僧侶の一生／転住
- 三 僧侶の修学と犯罪など 913
 - 学問に励む僧侶―檀林と種子島出身僧侶―／種子島出身で本山の住職になった僧侶／墮落する僧侶（僧侶の犯罪など）／仏法廃壊

第四節 生活と密着した法華宗寺院…………… 923

- 一 一年中行事 923
- 二 雨乞い 926
- 三 虫（蝗）祓い（避け） 927
- 四 病気払い 929
- 五 寺入 929
- 六 安産 931
- 七 怪異・変異 931
- 八 首途・航海安全 932
- 九 厄払い 933
- 一〇 その他（牛馬の死） 933
- 第五節 キリスト教禁止と永俊尼…………… 934
 - 一 永俊尼の種子島配流 934
 - 二 キリシタン宗門改 936

三 宗門手札焼失 937

藩庁届の必要／藩縮方横目派遣の場合／刑罰の科銭及び寺入／

延焼／特記事項／一向宗取り締まりと種子島配流

第五章 種子島の文化

第一節 学問—大園学校— 944

第二節 種子島家譜—系図の枠を超えた系図— 946

一 藩政期に編集された種子島家譜 946

二 家督制、身分制の秩序を保証する系図 946

三 幕府の『寛永諸家系図伝』『寛政重修諸家譜』等の編集 947

四 『系図伝』編集に触発された島津氏の『島津氏正統系図』 948

五 「種子島家古来記録」「種子島家旧記」の存在 948

六 「(種子島)譜」の編集 949

七 「種子島系図」 949

八 「種子島家譜」 950

九 長い年月をかけた系図の編集 950

一〇 種子島氏の系図編纂事業の全容解明にむけて 951

一一 明治期の種子島家譜編纂事業と、その後 952

第三節 種子島家と分家系図 953

第四節 種子島と和歌 955

第五節 西之表市の石造物 959

一 中世の石造物 959

律宗ネットワークでもたらされたと考えられる石造物／他地域

との交易でもたらされたと考えられる石造物

二 近世の石造物 961

墓石として使われた石造物／一族や個人の事跡を刻む石造物／

石祠／かつての寺院の名残伝える石造物群／西之表市の特徴を

示す石造物

三 ま と め 964

第六節 大的始式 964

一 大的始式の始まり 964

二 大的始式の規則 964

大的始式の規則／大的始式に違反

三 大的始式の中止・延期 966

延期／中止／特記事項

四 大的始式再開 967

第六章 種子島の庶民の生活 969

第一節 庶民の生活 969

一 庶民生活の向上施策 969

二 庶民の生活 972

三 処 罰 976

窃盗、博打

四 火 事 977

第七章 種子島の産業 978

第一節 甘 藷 978

虫害祈祷／甘藷栽培の刑罰／養蚕と甘藷

第二節 甘蔗(さとうきび) 981

一 甘蔗の伝播 981

二 甘蔗の藩統制 982

砂糖生産による褒賞／砂糖売買による刑罰

●コラム● 曼 茶 羅 985

●コラム● 牛玉宝印 985

●コラム● 棟 札 986

●コラム● 種子島家と島津家・他家との婚姻関係 987

●コラム● 当主名跡松寿院の業績 988

【下
卷】

第六編 近 代

第七編 現 代

第八編 校 区 史

凡 例

一 本書は『西之表市史』上巻・下巻のうち、上巻である。

一 記述内容は令和四年三月までとしたが、掲載できるものについては、最新の内容を掲載した。

一 史実の内容は客観的であることに努め、出典・根拠を明らかにした。各編末に参考文献や資料を掲載した。

一 文体は常体とし、記述は現代仮名遣い及び常用漢字を原則とした。

一 引用文は、本文より二字下げで掲載した。また、原則として原文をそのまま記述した。

一 数詞の表記は原則的に次のとおりとした。
(年 号)

和暦とし、() に西暦を付した。また、明治以降は、節初出及び必要性のある箇所のみ西暦を付した。

(例) 令和六年(二〇二四)

(年月日)

「十」を用いて記述することとした。

(例) 平成二十九年十一月二十八日

(一般数)

数が多い場合には、「兆」「億」「万」を入れた。

(例) 五兆二〇三五億二三〇〇万六五八九円

一 人名は敬称を略した箇所もある。

一 内容が重複する箇所があるが、当該箇所にも記述があることで、読者に理解を深めてもらえたと考え、そのまま掲載した。

一 差別的用語は極力使用しないように努めたが、歴史用語として用いたところがある。これは、史実を正しく理解し、あつてはならない不当な身分差別制度の認識に資するためのものである。